昭和45年10月17日　第56巻第1号通巻648号　令和7年1月1日発行（毎月1回1日発行）ISSN 0910-9404

# 日本照明家協会誌

No.648
2025 / January 1

Journal of Japan Association of Lighting Engineers & Designers

JALED

巻頭言

## 開かれた協会を目指して

今月の一本

劇団鳥獣戯画　第105回公演

## うしろの正面だあれもいない ～観客に顔がわかるように考えています～

幻想的な明かりの演出「光のサークル」

市民手作りの紙袋ランタン

高さ３メートルを超える氷のレリーフ

子どもたちの歓声が響く雪と氷の大すべり台

60 回記念でお目見えした迫力ある大氷壁

澄んだ夜空を彩る冬花火が会場に華を添える

STAGE REVIEW

# ギリシア悲劇を改作する二題

演劇評論家　西堂 行人

『テーバイ』　撮影：引地信彦　提供：新国立劇場　照明：松本大介

古典をそのまま上演することは、必ずしも得策ではない。時代も変われば、価値観も変わる。歴史の風雪に耐えて生き残ったのが古典だとすれば、作品の中に根源的な問題が内在していることは確かだ。そしてそれをアップデートすることが、演出家の裁量というものだろう。演出家の時代を読む目が求められる。

新国立劇場で上演された『テーバイ』は、若手演出家の船岩祐太による意欲作だった。彼は『オイディプス王』を軸に六編の戯曲を再構成し、テーバイで起こった悲劇が何だったのかを考察しようとする。

ソポクレス作『オイディプス王』は最も有名なギリシアの古典だ。父を殺し、母と結婚したオイディプスは、自分の罪を知り、自ら眼を潰し、放浪の旅に出る。この劇には後日談がある。それが『コロノスのオイディプス』だ。盲目になったオイディプスは娘のアンティゴネに手を引かれてアテナイのコロノスにたどり着く。それは神託が告げた彼の死に場所だった。オイディプスはそこで死を迎える。

『アンティゴネ』はさらなる後日談だ。オイディプスの死後、跡目をめぐって戦った息子たちは、互いに刺し違えて死ぬ。祖国を守った兄と祖国を攻めたもう1人の兄。新王クレオンは前者を丁重に埋葬し、後者を野ざらしにするよう命じる。だが妹のアンティゴネは国法に背き、後者を自ら埋葬してしまう。クレオンは彼女に死罪を言い渡す。

こうした素材を3部構成に結集するにあたり、当然不都合も生じてくる。たとえば、オイディプスの義弟にあたるクレオンは、『オイディプス王』では温厚な人柄だったが、『アンティゴネ』では権力欲の強い人格として描かれる。『テーバイ』の挑戦はこの矛盾し、ねじれた役柄を俳優がいかに接合していくかにあった。近代劇のように「統一された性格（キャラクター）とするか、それとも権力を握った瞬間から人格が変わり、その変貌を描くか。クレオン役の植本純米は、時に滑稽に、時に冷酷に、引き裂かれた役柄を演じた。それにより、この人物に潜む人間の多様な面が浮かび上がってきた。統一されざる人物像は現代的ですらある。

かくして、この劇の主役に躍り出たのがクレオンだが、彼を脅かす存在が出現した。妻のエウリュディケである。原作では一言も発しない彼女だが、船岩演出では言葉が与えられ、決定的なことを発言する。彼女は、兄弟の殺し合いの根因は、夫であるクレオンが止めなかったことにあると断言し、続け

『テーバイ』　撮影：引地信彦　提供：新国立劇場　照明：松本大介

て誰かの責任を追及するのではなく、これからの希望を探ることが重要なのだ、と静かに語る。責任をなすり合って犯人探しをする今日からすると、彼女の言葉はきわめて明晰で的確な判断だ。そして未来の人間がすべき行動をも指し示している。

この悲劇では、コロスという重要なパートが排除されている。コロスは民衆（市民）、すなわち観客を代弁する役割であり、そこで起こっている出来事に立ち会い、見守るミッションを課せられている。そのため、コロスがいなくなると人間と人間がむきだしになり人物同士の対立が濃厚な、つまり近代的なドラマと化す。ギリシア悲劇は本来、都市国家のあり方や行く末を問うことに主眼があるが、この上演では市民の姿が見えず、「家庭劇」になり、古代的なギリシア観は現出しなかった。コロスという存在は、ドラマを家庭内悲劇に完結させず、共同体や国家の問題へ開いていく仕掛けだったのだ。とすると、これは果たして「ギリシア悲劇」なのだろうかという疑問が湧いた。

他方、大阪の劇団清流劇場は、トロイア戦争を扱ったエウリピデス原作の『ヘカベ』から、『ヘカベ、海を渡る』として改作、上演した。演出と台本の田中孝弥（あつや）は、関西弁を使ってギリシア悲劇を手近に引き寄せた。紀元前1200年頃に起こったトロイア戦争は、ギリシア連合軍が勝つ。この劇は負けたトロイアの女性たちをギリシアへ連行する直前の物語だ。トロイアの王妃ヘカベは戦争中、息子の1人を隣国トラキアの王に財宝とともに託した。だがトラキア王はトロイアの敗戦を知ると息子を殺し、財宝を奪った。それを知ったヘカベは彼を深く怨み、彼の幼い息子を殺し、王の眼を潰す。この残酷な復讐に対して、ギリシアの総大将アガメムノンはヘカベに「やり過ぎではないか」と非難する。ここで田中が書き加えたエピローグが目を惹く。

アガメムノンの言葉に逆上したヘカベは、思わず剣で彼を突き刺す。アガメムノンは帰国直後に妻の王妃に殺害されることになっている。ここで絶命するわけにはいかないはずだ。あるいはこの改作劇は原作と異なる結末になるのか？と誰もが思う。幕切れでヘカベはこう呟く。「お前だけには言われたくなかった」と。トロイアを滅ぼした張本人が何を言うのか！　ヘカベの誇りこそ復讐の連鎖を生む原動力だ。被害者は加害者に転じる。人間たちはこの愚行をいつまで繰り返すのか。

このストーリーからイスラエルとパレスチナの関係を想起することは容易だろう。さらに沖縄の基地問題も書き込まれている。3200年前のトロイア戦争と現在がつながっていく。だがその分、ドラマは現代の政治的メタファーに比重が傾いていく。

ギリシア悲劇は単なる家庭劇ではない。その悲劇は国家に絡めとられた家族であり、歴史を超えて現在に届く劇なのだ。

ここで用いられた関西弁はゆるくドラマは悲劇らしくないが、コロスは登場し歌い踊る。それが観客を古代の時間のゆるやかさに誘ってくれた。

『ヘカベ、海を渡る』　撮影：坂内 太　提供：清流劇場　照明：森 和雄